普通小学校において視覚障害児の統合教育を実施して

大阪市立住吉川小学校
竹　内　敏　晴

はじめに

私と杉本久弥子ちゃん（以下クミちゃん）との出会いは、私がまだ大阪市立盲学校（以下市盲）に在職していた頃にさかのぼる。日本ライトハウス盲人情報文化センターで、盲児のための「わんぱく文庫」の催しがあり、市盲の子供たちも参加していたことで、顔を出した折、普通学校で学ぶクミちゃんを知った。その時は私がまさか彼女の担任になるとは夢にも思っていなかった。しかしその後、住吉川小学校のクミちゃんの１年の担任Ｋ先生が、同じ大阪市立ということもあって、盲学校へ見学に来られて、ひとつひとつ出会いが重なっていった。住吉川小学校の先生方のクミちゃんへの思いや模索がまず教員間の交流として始まって、その中で、私も学校を見学し、校長先生とも話し、さらに校内で行われた教職員組合の点字教室へも講師として参加し、クミちゃんをとりまく人々の動きの中で、私は彼女が３年生になる年に住吉川小へ転勤してきた。今になっても、奇遇のようにも、必然のようにも感じられる。

Ⅰ　入　　学

クミちゃんの入学は、大阪市立の小学校としては初めての普通校在籍となることで、当初教職員の中で不安があったようだ。視覚障害児の統合教育では常に同じような不安が起きる、と聞いている。しかし、この不安を乗り越えさせたのは、御両親のクミちゃんへの思いであったと思う。双子として生まれ、クミちゃんが一人視覚を失ったという境遇は、姉のエミちゃんとの共生、ふたりの共通の体験を大切にしたいという思いが並々のものではなかったろうと想像する。

『統合教育』という言葉の中には、そのひとつひとつの事例を巡る人々の、とりわけ両親の思いがなかなか見えてこない。しかし、そのひとつひとつが実

は理屈抜きで人間同士のぶつかりあいの中で生まれてきたと考えるのである。

だから、クミちゃんの入学は、いくつかの困難を乗り越えて始めて実現したということをやはり記しておかねばならない。

Ⅱ　1年から2年へ

実際、クミちゃんの入学はほとんど手さぐりの中で進められていた。点字教科書も当初お母さんの努力でボランティアを見つけ、自己負担だったように聞く。

また、教員も視覚障害児についての知識を持ち合わせていないし、点字も当然はじめての出会いである訳だ。

住吉川小を訪問した時に最初に見たのは、墨字の指導だった。レーズライターを使った読み取りと書き取りだったと記憶している。この学習は抜き出しの授業で行われていたようだ。だから、クミちゃんに関わっていた先生は、基本的には担任の先生と養護担任の二人であった訳だ。この墨字指導が学校での文字学習であって、点字は家庭でお母さんがなされていたようである。

この墨字学習は統合教育のケースでよく見られるもので賛否両論あるとは思うが、クミちゃんの場合は、のちの図形学習や指先の養護・訓練の領域における基礎的なものをこの学習で獲得していったのではないかと考えている。もちろん人一倍優れている、というふうな意味ではないが、それは点字学習だけでは得られないものであろう。

盲学校の場合、1年生の点字学習には特別のカリキュラムを用いて行われるが、当然普通校の先生方は御存知ないし、たとえ知っておられたとしても、40名前後の児童との一斉授業の中では不可能に近いものである。クミちゃんの墨字指導が良いか悪いかではなく、どのようなものに繋げて行けばよいのかを考えるべきだ、私はそう考えた。

この時期のもう一つの問題点は、歩行についてである。低学年の場合、まわりのたくさんの友達に支えられての学校生活の中では、どうしても手引きが多くなってしまう。また、校舎も盲学校のように配慮されたものではないので、指導者の側が危険に対して過度に敏感になってしまって、ひとり歩きをさせに

くいものだ。このことは、普通校で学ぶ視覚障害児にとって意外なおとし穴になっているのではないか、と思われる。

もちろん学校は、このことを考慮してさっそく校舎の段差の解消と階段の手すりの設置を行った。ハード面でのケアは時間が経つにつれて改善されていくが、問題はソフトの面である。友達の手引きをどう扱うか、積極的な一人歩きをどう引き出すか、などだ。この課題は、クミちゃんの場合6年生になるまで残った問題であった。

Ⅲ　点字教科書

当初、お母さんとボランティアで始められた点訳であったが、徐々に学校サイドからの点訳依頼と保障に変わっていった。2年生になった年の暮れに、住吉川小から点訳についての相談を受けた。盲学校の使用している教科書と重複しておればいいのだが、まったく重複しておらず、一から墨字教科書の点検をはじめた。盲学校の場合は、文部省で経験のある教員が全国から集まって検討するものを一介の未経験者がやるのだから、はっきり言って冒険であった。この時、住吉川小でこの作業の責任者を務めた先生が、後にクミちゃんの3年4組の担任になったＩ先生である。

この時は私もたいしたアドバイスもできずにいたのだが、墨字教科書を一頁一頁点検して点訳者に「点訳指示書」を送る形を作りあげることができたのは、Ｉ先生の熱意の賜物だったと考える。

現在も点訳教科書については、視覚障害者の統合教育にとって悩みの多い問題である。点訳機関も点訳者もそんなに多いわけではないし、ましてや教科書点訳のマニュアルも整備されていない現状では一つ一つが暗中模索でしかない。

3年になって、点字教科書は主要3教科が用意された。4年生の時、4教科と「にんげん」、5年生になって家庭科が点訳された。体育と図工は必要ないであろうと判断した。ただ、心残りなのは音楽科を最後まで点訳できずに終わったということだ。クミちゃんがピアノを習っていて、音楽についてはかなりのレベルであったのをいいことに、やや安易に判断した点は反省せねば、と思っている。

点訳については、その他、山程言わねばならないことがあるが、それはむしろ晴眼者の側の問題なのでこの辺で置いておく。

Ⅳ　3年から4年へ

3年生になった4月、私が住吉川小に転勤してきた。クミちゃんはその時、たいへん明るく無邪気な女の子という感じだった。そして、盲学校の子供たちと比べてやや幼いなあという感じを受けた。

しかし、問題だったのは私自身であった。とにかく盲学校の数倍にぎやかなのに面くらった。これでは、声や音をたよりに動くというのはたいへんだなという実感がしたし、何より子供たちの動きの早さで、カルチャーショックを受けた。

まずは最初の二年間、私は養護学級の担任となって普通校の第一歩を踏み出し、週に2～3時間クミちゃんの抜き出し授業を受け持った。習字と図工の時間や放課後に行い、主に点字・歩行・計算の学習が中心だったが、当初は担任が補なえない点字の学習が中心になった。点字板を使っての文章作りと読み取りで、盲学校の児童と比べたら、かなり遅れていた。でも、彼女は大変ながんばり屋さんだということにすぐ気付かされた。学校でやり残したことをお母さんがきちんと補なっていただいたことも、学習を進める上で大きな力になっていた。また放課後の学習にはお母さんが必ず学級に来られて、クミちゃんの学習の様子を見ていかれた。

そのような中でまず気付いた点は、それぞれの子供の個性の違いは普通校と盲学校という環境の違いよりも遥かに大きいということだった。盲学校時代には、普通校から盲学校へ転校してきた子供もいたし、これまでいろんなケースを見てきたが、子供たち一人ひとりの持っている個性が新しい環境にどのように適応していくかが問題であって、器の問題（学校の問題）ではないな、という感じがした。

しかし、そうは言っても問題がない訳ではない。クミちゃんの場合は、視覚障害児にありがちな、言葉あそびや音あそびが目立ち、実体験に結びついた言葉が少なかったのは事実だ。それが、幼いという印象を生んでいたと思う。た

ぶん、1・2年の頃言葉遊びをしていても注意されなかったのだろうと想像する。普通校の場合、どうしても甘やかされる傾向があるのはしかたがないのだが、彼女が性格的にがんばり屋さんであると同時に思い込みの激しい所もあって、その傾向が一層顕著に出てしまっているようだった。

点字学習をする中で、表現の方法や気持ちの言い表し方など、一つひとつ点検していくのが大きな目標になった。これは、友達との関わりにおいても大事な課題だった。たくさんの友達が周りにいて様々に関わってくれるのだが、彼女はそれを消化しきれていない現状だった。

とくに、それは歩行によく現れていた。手引きされるとどこへでもいくのだが、まったくまかせっきりという感じであった。自分からひとり歩きをしない、声を掛けてもらわなくては動こうとしない、というのがこの時期のクミちゃんだった。

私が盲学校で「当たり前」と思っていた事がここでは「危険」と思われていたり、これは叱らなければと思っていた事は、こんなものだろうと思われていたりした。そんなちょっとした違いが、実は彼女の『社会性』の遅れに現れたのだと思う。

こんなことがあった。物語を読んでいて、感想を書かせようとしている時である。その物語がたいそう悲しいお話しなのに、彼女はある一節に擬態音の面白い表現があったのを見つけ、それをしきりに楽しがっているのだ。見ていくと、一つひとつの言葉のイメージがまだ出来上がっていないことが分かってくる。

2年間の学習で、いわゆる学習についてはかなりの進歩が見られた。特に知識学習や点字については、おおむね当該学年のレベルに達してきた。5・6年生への課題は社会性と歩行に絞られてきたと考えていた。

V　5、6年

5年生になって、はじめて彼女の担任となった。と同時に、私個人としても40人からなる普通学級を初めて担任するということになった訳である。

まず、彼女に対する全体的な学校生活について、どんなことでも健常児と同

じようにさせてみようという考えがあった。4年生までは何らかの形で抜き出しがあり、補助の先生が付いていたりしたが、これからはすべてひとりでやるという気持ちを、私もクミちゃんも持っていかねばいけないと考えていた。

そこで、問題となるのは周りの子供たちのクミちゃんに対する対応だ。未だに消極的な行動の多いクミちゃんに周りがどれだけの範囲で関わっていけばよいか、難しい課題であった。係活動や給食当番、教室移動や遊び時間の過ごし方などなど、一つひとつのケースを取り上げて説明する訳にもいかない子供たちの日常生活の部分だ。

しかし、実際は予想していたこととは違って子供たちの動きはずっと自然なものだった。たしかにトラブルもあったし、班活動の折には、クミちゃんの存在は子供たちにとって重いものになった時もあった。しかしそれを上回って、教師の見えない所で、しっかりクミちゃんと繋がっている子供たちを垣間見て驚いたこともしばしばであった。

クミちゃんの自立化に向けて、学級でいくつかの約束をした。例えば、音楽室へ行く時は一切手引きしないとか、彼女へできるだけ声がけをするとかいったことだ。最初は彼女にも戸惑いがあったようだが、なんとかついてきてくれたようである。それは、根っから楽天的な彼女の性格もあっただろうし、負けず嫌いな所もそれを助けてくれた。一度、廊下で迷って行ったり来たりしている時、他の学年の子が手引きしてくれて何とか知っている所まで来ることができた。その一部始終を見ていて、私は注意した。何を注意したかというと、自分から声をかけなかったことだ。彼女は急に口をとんがらしてブツブツと怒っていたことを思い出す。でも、次の時間にはケロッとした顔で話をしてくれる所が私の救いでもあった。なぜなら、声をかけることは非常に大事なことだが、また大変むずかしいことでもあるからだ。クミちゃんには過大な要求であると分かっていたからである。

Ⅵ　教科について

教科学習の点については、何も手がつけられていなかった。これまでの統合教育で扱われてきたいくつかの教具も充分活用できてはいないし、私自身、

40人からの学級経営に四苦八苦しているのが正直な話であった。以下、簡単に教科の状況を示しておく。

時間割り：5年生の時は3、4年担任のI先生が抜き出しの授業を持っていた。私の都合で行かない時も多かったと思う。音楽は専科のK先生に持ってもらっていた。6年になって、図工の時間をこれも1、2年生の時の担任であったK先生に持ってもらって、私は週2時間、補修という形でクミちゃんに一対一で関わった。

算数：計算は盲人用そろばんを使う。新しい単元に入って計算の基本を教える時は、レーズライターを使って墨字での計算方法を示すが、後の習熟の部分は全てそろばんでこなした。教科書が筆算中心の書き方をしているので、暗算の必要なそろばん学習には適していないことが一斉指導の点でややハンディだったかもしれない。また、6年のわり算の学習で水道方式を導入したのだが、操作の習熟に時間がかかり思ったほどの指導にはならなかった（低学年からの指導が必要である）。図形学習はかなり時間がかかるので、補修の形で補ったこともあったが、限界もある。

国語：反省として思うことは、意味調べに時間をもっとかけるべきであったということだ。言葉だけの理解に終わっていることが多かったと考える。意識的に文法学習に重点をおいて指導したが、それが彼女にとって良かったのか判断が難しい。また、国語は彼女の好きな教科でもあって、特に読みは気持ちを込めて読むのを得意としていた。クラスの友達も彼女の読みには一目を置いていた。

日記や作文を書くことは大切である。普段の学校生活の中から受けるクミちゃんの印象とは違ったものがそこから汲み取れるからだ。作文を巡って彼女といろいろ話し合うことが多かったものである。学級ではなかなか見えてこない部分を知ることと、彼女の表現力を養う上でも必要な課題であった。

理科・家庭科：作業が必要な教科は特別の準備がいる。特に天文分野と化学分野が難しく知識理解に終始してしまった。しかし、作業は準備次第でかなりのものをこなしてくれた。家庭科での包丁は本人が怖がっていたが、必ずやらせるようにした。火を扱う作業はこちらが手を添えていないと危険だが、出来

る限り取り組んだ。裁縫は私の予想を遥かに越えてやってくれた。家庭でお母さんにかなり補習をしていただいた成果ではあるが。

社会：地理学習が大変難しく、本当の意味での地理学習にはなっていなかったと考える。校内歩行がやっと端緒についたばかりのクミちゃんに地理、とりわけ日本地理は大変であったと思う。しかし、家庭の方から旅行やキャンプなどに精力的に彼女を連れ出していかれたのが、これからの彼女の社会学習の糧になっていくと思う。

体育：走る、歩く、跳ぶ、泳ぐの個人課題については他の友達とも対等にがんばって活動していけた。50メートル直線走では一人で走って最高記録は10秒台であった。ただゲームになると、特にボールを扱う時は私が手をつないでするか（サッカー）、盲人用ルールを一部適用してするか（ソフトボール・キックベースボール）どちらかで、かなりハンディがある。また、視覚障害者にとって腕の使い方が苦手になる傾向があるので、なわとびは腕と跳躍のタイミングを習得するのに恰好の教材であった。

その他：図工や習字をどこまでするかについては学校での時間の遣り繰りにかかっていた。個別の指導の時間はどうしてもいる。普段の一斉学習では落としがちな部分を補う必要があるからである。その時間をどこから捻出するかとなると、この図工や習字にならざるを得ない。特に習字は全くと言っていいぐらいやっていなかった。

その他、教科以外の取り組みは校外での学習として社会見学・遠足・歩こう会・キャンプなどがある。こんなエピソードがある。キャンプで狭い山道を友達に手を引いてもらって歩いていて、足に怪我をした時のことである。血が出ていて周りの友達が心配してワイワイ言っているのに、本人はケロッとしているので、血を触らして少し脅かすと急に心配になったのか、痛がったということがあった。しかし、総じてよく周りの友達が支えていたし、本人も頑張ったと思う。

Ⅶ　まとめ―卒業と反省

本年3月の卒業式を終えて、今改めて振り返ってみると、クミちゃんとの出

会いから現在まで、当たり前の付き合いをしていきたいという考えでやってきたつもりである。担任を引き受けた時も、それが如何に冒険であるかを知らずに流れとして受け止めた。しかし今になって、どれだけできたのかという後悔がふつふつと沸いてくる。

ただ、卒業と同時に、その後入学した加賀屋中学校の先生方の熱心な取り組みは、最後に付記しておきたいと思う。本年度当初から、受け入れ体制を整えていく取り組みとして、点字教室を開いたり、点訳のことで奔走し、何度も話し合いの機会を持っていただいたことに感謝している。

一学期の最終日にクミちゃんが学校へ来て、中学での学習や生活を報告してくれた。また、ひとまわり大きく成長したクミちゃんとこれからも当たり前に付き合っていきたいと感じている。

《インフォメーション2　研究会》

第3回日本視覚障害リハビリテーション研究会

期日：1989年8月3日（木）～8月4日（金）

会場：大阪市立社会福祉センター

（〒543　大阪市天王寺区東高津町12－10　℡ 06－765－5641）

事務局：日本ライトハウス職業生活訓練センター内

第11回視覚障害乳幼児研究大会

期日：1989年8月26日（土）　10：00～16：00

会場：日本ライトハウス盲人情報文化センター

（〒550　大阪市西区江戸堀1－13－2　℡ 06－441－0015）

事務局：京都ライトハウスあいあい教室内

第13回視覚障害歩行研究会

期日：1989年11月9日（木）～10日（金）

会場：日本ライトハウス盲人情報文化センター

（〒550　大阪市西区江戸堀1－13－2　℡ 06－441－0015）

事務局：荒川区立心身障害者福祉センター内